

展 望

間 接 的 発 話 行 為

池 田 進 一*

INDIRECT SPEECH ACTS

Shinichi IKEDA

Many philosophers have developed a theory of speech acts, which refers to the many functions performed by utterances as part of interpersonal communications. This paper reviews a considerable amount of psychological studies on speech acts, particularly on indirect speech acts where the speaker communicates requests by virtue of asking questions to the addressee. Finally, orientations for future research are proposed, the most important being connected to problems in the experimental paradigm related to an examination of indirect speech acts.

Key words : discourse, pragmatics, speech acts, indirect requests.

1. は じ め に

日常生活のなかで、相手に何かを伝える場合、その伝えたい内容の特徴づける条件の一部を発話することによって、念頭においている意味を間接的に表現することがしばしばある。一般に、これを間接的発話行為といい、そのなかで要求を含むものをとくに間接的要求という。近年、間接的発話行為は、日常言語における生産と理解の機構の問題に多面的にかかわる重要な研究対象として注目されている。

間接的発話行為に関する研究は、広い枠組みからいえば、談話研究、とりわけ会話研究に含まれるものであり、枠組みを狭めるならば、語用論や言語行為論(発話行為論)の研究のなかに位置づけることができる。

会話に関する研究は、心理学のみならず、社会言語学、社会学、哲学などの分野からもなされてきている。社会言語学では、その研究対象を言語に反映された社会的事象においている。そこでは、実際の会話を分析することによって言語使用の実態を記述する。社会学においては、自分と他人が、対面的な状況で、さまざまな手がかりを用いて、互いの関係を調整しながら会

話を進めていく過程を分析する。そうした分析にもとづいて、人は社会をどのように維持したり、改変したりするかを探ろうとする。哲学からは、J.L.Austin や J.R.Searle や H.P.Grice らによって言語行為論、あるいは会話の公理という立場から会話研究がなされてきている。その動向については後に述べる。心理学においては、哲学研究からの影響を強く受けつつ、言語が対人的コミュニケーションの道具として使用されるようになる心理的過程を追跡しようとする(入谷, 1981)。より具体的にいえば、話し手と聞き手とが、文脈や状況を含めた現実世界に関する動的な情報や知識を、どのように理解し、記憶し、利用しているかについての検討をしようとする(戸田・阿部・桃内・往住, 1985)。

本論文では、以上に述べたような、広い枠組みとしての会話研究の状況をふまえながら、さまざまな研究上の枠組みから、間接的発話行為、とりわけ間接的要求の研究を概観し、今後の課題を指摘する。

2. 語用論・言語行為・間接的発話行為

本節で述べるように、言語行為論は、語用論のなかの1つの立場からの研究をさし、間接的発話行為論は、言語行為論のなかの1つの領域をさす。ただし、Austin, Searle, および Grice は自らの研究を語用論

* 文教大学 (Bunkyo University)

に含まれるとは見なしていない。その理由は、河上(1980)によれば、彼らは、L.Wittgensteinが1930年代に提唱した「語の意味は用法によって決まる」という考え方を受けついでいるために、意味と使用とを分けないことによる。換言すれば、意味論と語用論とを区別しないことによる。

2.1 語用論

語用論 (pragmatics) という用語は、アメリカの哲学者 C.W.Morris によって1933年に刊行された著書 “Foundations of the theory of signs” のなかで初めて公に用いられた。Morris は、論理実証主義(概念と命題の意味を論理的に分析し、概念や命題から意味をもたない非経験的な要素を除去しようとする方法) による形式主義に対して、記号研究に意味論の導入をはかった。そして、記号を、統語論(記号体系に内在した記号と記号の関係)、意味論(記号と対象との関係)、語用論(記号と使用者との関係)の3つからなるものと見なした。

語用論は、現状では、研究の対象となる現象を限定することがむずかしいので明確には位置づけられていない(山梨, 1989)が、本稿では一応、「表現とその使用者との関係を研究する分野」(河上, 1980)という定義にもとづいて論を進める。河上(1980)によれば、この定義における「表現」の解釈をめぐって2つの立場がある。1つは、表現を発話文であると解釈する立場で、そこでは語用論とは、発話文とその使用者との関係を研究する領域である。もう1つは、表現を文の要素であると解釈する立場で、そこでは語用論とは、文の要素とその使用者との関係を研究する領域である。前者の解釈では、語用論は、発話文の用い方の研究、または言語行為の研究をさす。一方、後者の解釈では、文の要素間における意味的・統語的關係と使用者との関係を研究することになる。

Sperber & Wilson (1981) は、上記のような2つの「表現」の解釈のうちの前者の立場に関して、そこでの研究対象には次の6つがあるとしている。すなわち、①多義性がどのように解釈されるのか、②指示がどのようになされるのか、③文の断片がどのように解釈されるのか、④非文法的な発話がどのように処理されるのか、⑤前提現象がどのような役割をするのか、⑥含意がどのように作動するのか、である。これらのなかで、⑤の「前提」は、一般的には、語用論的前提と呼ばれる。これは、発話とその文脈との関係にかかわる情報で、命題の真偽に影響されない条件をさす。語用論的前提に相対するのは論理的前提である。これは、発話の言語学的な意味から演繹できる条件をいう。ま

た、⑥の「含意」とは、一般的には、語用論的含意と呼ばれる。これは、論理的含意に対するもので、直接には主張されず、論理的にも含意されないが、聞き手がその発話から期待するものをさす。

間接的発話行為は、以上のような6つの研究対象のうちでは、主に①、②、⑤、および⑥にかかわっている。

2.2 言語行為と間接的発話行為

哲学からの言語研究の典型例が言語行為論である。この立場の代表者は、20世紀中葉以降に相次いで輩出した、イギリスの Austin, アメリカの Searle, およびアメリカの Grice である。

なお、以下に記述する彼らの理論の紹介は、主に Austin (1962), Searle (1969, 1975), および Grice (1975, 1978) によっている。

Austin は、命題の真偽を問題にしてきた G.Frege らによる伝統的な言語研究 (たとえば, Frege, 1892) に対して、文の実際の発話が同時に行為の遂行となっていることを示した。

次に3つの例をあげよう。

- (1)「君を課長に命ずる。」
- (2)「ここに東京オリンピックの開会を宣する。」
- (3)「地球は青かった。」

(1), および(2)の文を発話することは、それぞれ命令、および宣言を意味しており、(3)の文のように事態を描写しているわけではない。また、(1)と(2)は、その真偽を検討することができないが、(3)ではそれが可能である。こうした点から、(1)や(2)のような文を行為遂行的発話(performative utterance)と呼び、(3)のような文を叙述的発話(constative utterance)と呼んだ。さらに Austin は、行為遂行的発話が機能するためには一定の条件が整わなければならないことを指摘した。(1)を例にとると、この発話を、部長以上の者が平社員に言った場合にのみ命令として有効になる。このように、発話が遂行的に機能するための条件を適切性条件(felicity condition)と呼んだ。

Austin は、後に、(1)にかかわって、たとえば「私は課長になる。」と発話することは、叙述するという行為を遂行することでもある点に気づいた。つまり、行為遂行と叙述という区別が必ずしも明確なものではないことを認めた。そこで、Austin は、これら2つを分けることをやめ、文を発話するときに、どのような行為を遂行しているのかを記述しようとした。

Austin は、上記のような観点から、発話によってなされる行為を次の3つに区分した。第1は、発話行為

(locutionary act) で、これは一定の音声や、文法にかかった語句や、一定の意味をもつ文を発する行為をさす。第2は、発話内行為 (illocutionary act) で、これは発話行為にもとづいて、何かを言いつつ遂行される行為である。つまり、発話行為を通して、疑問、命令、依頼、約束、感謝、報告などの機能をにう行為が成立する場合をいう。そして、こうした機能を、表現の意味と区別して、発話の効力 (illocutionary force) と呼んだ。第3は発話媒介行為 (perlocutionary act) で、これは、発話内行為を通して、何かを言うことにより、何らかの発話の効力をその結果として生みだす行為をさす。

ある種の発話には、字義通りの意味から生ずる発話の効力と、状況から判断される発話の効力が異なる場合がある。

次の例はその1つである。

(4) 「東京駅はどこかわかりますか。」

(4)の発話の効力、すなわち字義通りの意味は質問であるが、これに対して「はい、わかります。」とだけ答えて立ち去ってしまうことは通常はありえない。つまり、(4)は、その場所を教えてほしいという依頼と受けとるのが普通である。このように字義通りの解釈とは異なる発話の効力をもつものを間接的発話行為といい、そのなかで、要求を含んでいるものを間接的要求という。

Searle は、Austin の後をついで言語行為論の体系化につとめた。とくに、適切性条件をより精密化することによって、発話の効力に関して研究をすすめた。

まず、Searle は適切性条件を次の4つに分類した。すなわち、発話の内容が満たすべき命題内容条件、話し手と聞き手との関係などの発話の状況に関する準備条件、話し手の意図に関する誠実性条件、特定の発話内行為の遂行に必要な本質条件の4つである。Searle は、これら4つの適切性条件を利用して、ある発話行為が間接的発話行為になるための条件を論じた。その条件とは、「話し手はある発話行為の適切性条件を断定するか、あるいは質問することによって間接的にその発話行為を遂行することができる」というものである。具体的には、①聞き手の実行能力に関する予備条件を断定するか、あるいは質問する、②命題内容条件を断定するか、あるいは質問する、③誠実性条件を断定する、④その行為をするべき理由を断定するか、あるいは、その行為をしない理由が存在するか否かを質問する、という4点である。

さらに、Searle は、4つの適切性条件とかわつ

て、聞き手が間接的発話行為を理解する過程を提案した。それは次のような3段階からなる。すなわち、①聞き手は文の字義通りの意味を計算する、②聞き手はある文脈において、その字義通りの意味に欠陥があるかどうかを決定する、③字義通りの意味に欠陥があれば、聞き手は、会話の公理や言語行為に関する知識などに依存して、話し手の伝達しようとする意味を導くような意味を探す、というものである。彼は、これらの段階のうちで、②と③において、4つの適切性条件のいずれか1つ、あるいは2つ以上の条件が作用すると考えた。

田窪 (1988) によれば、Searle のあげた適切性条件は、ある発話内行為が間接的発話行為となるための必要条件であって、必要十分条件ではない。つまり、Searle のいう適切性条件は、(4)が依頼になりうることを示すのみで、字義通りの意味として機能するのか、間接的発話行為として機能するのかを説明しないという問題点をもつ。

さらに、Searle の理論は、慣習性の高い表現の場合にはうまくいくが、(5)のBの発話が拒否を意図していることは説明できない。

(5) A: 「テニスをしに行かないか。」

B: 「明日、心理学のテストがあるの。」

田窪 (1988) の批判や(5)における問題点に対して、ある程度の解決の可能性を示したのが、Grice による協調の原理と会話の公理である。協調の原理とは、その時に進行している会話の方向や目的にあうように会話に参加せよ、ということをさす。この原理が機能するためには、次の4つの公理が作用することが必要である。第1は、量の公理で、これは、会話の現在の目的からみて必要なだけの情報量を発話に含めよ、また情報の提供は多すぎても少なすぎてもいけないということである。第2は、質の公理で、これは、発話を真実のものとしよ、偽りだと信じていることを言うな、適切な証拠を欠いていることを言うなということである。第3は、関連のあることを話せという関係の公理である。第4は、わかりやすく、曖昧さを避け、簡潔に、順序よく話せという様式の公理である。

Grice は、協調の原理と4つの公理によって、会話の含意という概念を提案した。彼は、間接的発話行為を通して伝達される意味を会話の含意の一種と見なしたのである。要するに、協調の原理に反するような発話をする者は、聞き手がその発話の間接的な意味を推論することを期待するということである。なお、会話の含意は、すでに述べた語用論的含意のなかに含められる

概念である。

3. 間接的発話行為に関する心理学的研究

前節では、間接的発話行為に関して、主に哲学者による所説を概観した。本節では、間接的発話行為にかかわって、生産過程、理解過程、および理解要因についての心理学的な研究を整理する。

3.1 生産過程

どのように意味をつくりだすかという生産過程に関する心理学的研究は、以下に数例をあげるが、きわめて少ない。成立機制を検討した研究では、主に聞き手に対する話し手の心づかいに焦点をあてている。

Wilkinson, Wilkinson, Spinelli, & Chiang (1984) は、6歳児から8歳児を対象に、要求の機能に関するメタ言語的な知識を分析した。操作された要因は、3つの要求の型、4つの要求の種類、および2つの場面であった。要求の型は、手続的な情報を求める要求、学業に関する情報を求める要求、行為を求める要求であった。要求の種類は、① 'would' や 'could' などの助動詞を用いた間接的要求、②①に 'please' がついた間接的要求、③ 'please' を用いない宣言文による間接的要求、④ 'please' を用いない命令文による直接的要求、であった。場面とは、教師に対する場面と他の子どもに対する場面であった。実験は、判断課題と産出課題に分かれていた。判断課題では計24種類の要求文の適切性を評定させた。また、その評定の理由も回答させた。産出課題では、上記のような24条件を提示して、それぞれの条件に対して適切だと見なされる要求文をつくらせた。結果においては、年長になるほど、多くの種類の間接的要求を生産し、ある特定の要求を不適切と判断する率が高くなり、その判断の理由は主に語用論的な違反をしているか否かにもとづいていた。また、年齢にかかわらず、行為に対する要求は間接的要求を、また情報に対する要求は直接的要求を、それぞれ用いることによって生産した。これらの結果は、子どもは就学時にメタ語用論的知識をすでにもっていること、および、それらの知識は就学してから数年後に顕著となることを示すものと解釈された。

池上・梅本 (1986) は、言語のもつ対人関係を調整する機能に焦点をあて、小学校2年生と小学校5年生を対象に、依頼要求の言語表現が聞き手との親密度によってどのように変わるかを検討した。その結果、親密ではない聞き手に対しては間接的要求が、また親密な聞き手に対しては直接的要求がそれぞれ多かった。また、依頼要求が断られた際には、小学校5年生の男

子を除いて、親密ではない話し手に対しては丁寧な反応を、親密な聞き手に対しては丁寧ではない反応をそれぞれしていた。こうした結果は、すでに小学校2年生の段階で相手との心理的關係に応じて発話することを示すものと解釈された。

子どもを対象にした以上2つの研究の問題点として、「何が発達するのか」という観点が希薄であり、結果に関する成立機制に対する言及がほとんどなされていないことがあげられる。

岡本(1984, 1986, 1988)は、大学生を対象にして、池上・梅本(1986)と同様の実験を含む一連の研究をした。その結果においては、池上・梅本(1986)と同様に、親密ではない聞き手に対して間接的要求が多くなることなどを見いだした。ただし、上述の2つの研究と異なる点は、3.2.2で紹介する損益理論(costs and benefits theory)などをとりあげ、結果に関する成立機制にも関心を向けていることである。

Francik & Clark (1985) は、話し手が情報を求める際に何らかの障害に直面したときに、間接的要求を生産するという仮説をたてた。ここでいう障害とは、聞き手がその情報を、知らないかもしれないし、与えたくないかもしれないし、あるいは、想起できないかもしれない、といったことである。話し手は、そうした障害をとり除くために、条件を含む間接的要求をするという。たとえば、“Do you remember what time the concert begins tonight?” (「あなたは今夜のコンサートが何時に始まるかを覚えていますか。」)という間接的要求を生産する際には、この要求は「あなたはコンサートが何時に始まるかを覚えていますか。もし覚えているならば、どうか教えてください。」という条件性を含んでいると見なす。彼らは、大学生を対象にした実験をおこなって、この仮説を裏づけている。

Gibbs & Mueller (1988) は、Francik & Clark (1985) における障害という概念を拡張させた障害仮説(obstacle hypothesis)を前提として研究をおこなった。Gibbs & Mueller (1988) は、話し手が間接的要求をするための準備的な要求としての前要求(pre-request)に関して、障害仮説によって検討した。障害仮説においては、聞き手が、話し手からの要求に反応しにくい、あるいは反応できないような理由をもっていること(障害)を想定する。そして、その障害に対して、話し手から配慮される程度に応じて、聞き手が要求にしたがう可能性の高まることを予想する。実験1では、障害の大小と前要求の有無を組合わせて4種類の短い話を作成し、それらの話を大学生に読ませ、それぞれの話に対する

要求文を記述させた。その結果、障害の小さい場合には、“I would like ……”（「～したいのですが。」）のような「願望」による要求文が多いこと、および“Can you ……”（「～できますか。」）のような「能力」による要求文が少ないことなどが見いだされた。また、障害の大小にかかわらず、前要求のない話を読んだときに、多くの種類の要求をした。前者の結果は、障害が小さい場合には、聞き手の能力に言及する必要はなく、単に願望を述べればよいことを示しており、また、後者の結果は、前要求をすることによって、障害がかなり明確に特定されるから、種々の方法で要求をする必要はないことを示しており、いずれも障害仮説を支持するものと考察された。実験2では、障害の多少を要因にして、どのような会話連鎖を好むかを大学生に評定させた。その結果、障害の多少にかかわらず、前要求、提案、提案に対する受諾という順でなされる会話連鎖を最も好むことが明らかになった。最も好まれた会話連鎖とは、たとえば、客と店員の会話において、「～はありますか。」（客による前要求）、「お買い求めですか。」（店員による提案）、「ええ、2つください。」（客による提案に対する受諾）というものであった。この結果は、人は、前要求によって障害をとり除くような会話を好むことを示しているから、やはり障害仮説を支持するものと解釈された。

3.2 理解過程

Gibbs(1982)は、理解過程に関する心理学理論を3つに分けている。すなわち、字義第一モデル(literal first model)、多重意味モデル(multiple meaning model)、慣習的意味モデル(conventional meaning model)の3つである。以下では、この分類にもとづいて整理する。なお、上記のいずれのモデルに対しても批判がなされており、どのようなモデルが適切に関しては、さらに今後の検討が必要である。たとえば、多重意味モデルに対してはGibbs(1982)、慣習的意味モデルに対してはDascal(1987, 1989)による、それぞれの批判がある。

3.2.1 字義第一モデル

このモデルは、2.2で述べたSearleの3段階説にもとづいており、字義通りではない発話の字義通りの解釈は、伝達される意味が引き出される前に、常に最初に計算されると想定する。この立場を代表する研究はClark & Lucy(1975)である。彼らは、大学生を対象にして、間接的要求文と、その文の内容が描かれた絵とを同時に提示して、絵が要求文の内容を満たしているか否かを判断するのに要する時間を計測した。その結果、否定形を含む要求文は、肯定形を含む要求文より

り判断時間が長くなること、および間接的要求は直接的要求よりも検証するのに長く時間がかかることなどが認められた。彼らは、こうした結果にもとづいて、Searleの3段階説とは多少異なり、4段階からなる字義第一モデルを提案した。すなわち、①発話の直接的意味を算出する、②その意味が話し手の意図であるか否かを決定する、③もし、否であるならば、協調の原理と発話行為に関する約束ごとを用いて間接的意味を算出する。④間接的意味にもとづいて発話を利用する、というものである。要するに、Clark & Lucy(1975)の主張は、字義通りではない意味を理解するためには、字義通りの意味を理解する場合よりも時間と労力がかかったという点にもとづいている。

このモデルに関する幼児を対象にした研究では、おおむね支持する結果を得ているもの(Carrell, 1980)と、支持しない結果を得ているもの(Leonard, Wilcox, Fulmer, & Davis, 1978; Elrod, 1983)がある。

3.2.2 多重意味モデル

このモデルでは、字義通りの意味も、字義通りではない意味も、理解の際に同時に処理すると見なす。

Clark(1979)は、商店に電話をかけて、間接的要求文を提示するという一連の実験をした。その結果、聞き手は、間接的要求文における字義通りの意味が重要かどうかを理解する際に、3.3.1で詳しく述べるように、少なくとも6つの要因を用いていることを明らかにした。たとえば、“Do you know the time?”（「時間がわかりますか。」）という字義通りの意味と間接的意味とをもつ間接的要求に対する言語的反応を、人はどのように理解するかが検討された。そこでは、間接的要求の字義通りの意味は、間接的意味にそって受けとられるか、形式(pro-forma)として受けとられると予想された。すなわち、前者では、聞き手は“Yes, I do. It's six.”（ええ、わかります。6時です。）のように両方の意味に反応することが予想され、後者では、聞き手は“It's six.”（「6時です。」）のように間接的意味に対してのみ反応することが予想された。実験結果は、これらの予想をほぼ裏づけるものであった。この研究の意義は、Clark自身が、字義第一モデルを放棄した点、ひいては、Searleの3段階説をも否定した点、および、以下のような諸研究の先駆となった点にある。

Clark & Schunk(1980)は、実験1で損益理論を、実験2から実験4では損益理論に関連する注意仮説(attentiveness hypothesis)をそれぞれ導入しつつ、一連の検討をした。損益理論とは、話し手の要求は、聞き手の体面をそこなわない程度に応じて、聞き手は丁寧

だと受けとると想定するものである。注意仮説とは、聞き手が話し手の要求における意味に対して注意をはらうほど、聞き手の反応は丁寧になるとする説である。実験1では、「親しくはないが、知った仲間」という状況で、大学生にTABLE1に示されるような字義通りの意味が異なる間接的要求文のリストを示し、その丁寧さを評定させた。このリストでの、許可から義務までの6つの分類は、字義通りの意味にもとづいて、聞き手に対する利益に対して近似的に順序づけられており、順に丁寧でなくなる。たとえば、表中の①と⑭を比較すると、間接的な意味は同様であるが、①の字義通りの意味は、許可をするかどうかを聞き手にゆだねており、⑭のそれは、聞き手がその要求に回答する意図をもっているかを聞いている。すなわち、⑭の方が、聞き手に多くの負担をかけていることになる。したがって、⑭は①より丁寧ではないと予想された。さらに、彼らは、間接的要求における丁寧さに関する3つの要因として、条件性、否定性、力量性をあげた。条件性とは、発話の内容の何らかに対して条件的であることをさす。たとえば、②のような仮定法を用いた表現は、話し手が聞き手の意図をかなり考慮しているという点で、聞き手にあまり負担をかけないから丁寧だと見なされる。否定性とは、⑧のような否定形をとまなう表現をさす。これは、聞き手に肯定回答を期待する場合があるという点で、聞き手に負担をかけるから、あまり丁寧ではないと見なされる。力量性とは、⑭のような強意の表現をさし、これも聞き手に負担をかけるから、あまり丁寧ではないと見なされる。この実験の結果においては、要求文の丁寧さの順序はほぼ予想通りであること、および上記の3つの要因はかなり効果をもつことなどが確認された。さらに、実験2から実験4では、大学生に間接的要求に対する回答の丁寧さを評定させるなどの実験をした。その結果は、注意仮説をおおむね支持するものであった。彼らは、聞き手が注意をはらう意味として、間接的要求における間接的な意味と字義通りの意味をあげた。彼らは、以上のような4つの実験結果から、丁寧さはおおむね損益理論によって説明されること、および、その損益は字義通りの意味のなかにあるのだから、人は間接的意味の理解と同様に字義通りの意味の理解をも同時に必要とするという多重意味モデルを操作していることを主張した。

Kemper & Thissen (1981) は、成人を対象にして、TABLE1のリストに3つの文を加えて、丁寧さを評定させるなどの実験をした。その結果、各要求文の丁寧

TABLE 1 Clark & Schunk (1980) での要求文

分類	要 求 文
許 可	①May I ask you where Jordan Hall is ? ②Might I ask you where Jordan Hall is ? ③Could I ask you where Jordan Hall is ?
負 荷	④Would you mind telling me where Jordan Hall is ? ⑤Would it be too much trouble to tell me where Jordan Hall is ?
能 力	⑥Can you tell me where Jordan Hall is ? ⑦Could you tell me where Jordan Hall is ? ⑧Can't you tell me where Jordan Hall is ? ⑨Do you know where Jordan Hall is ?
記 憶	⑩Have I already asked you where Jordan Hall is ? ⑪Did I ask you where Jordan Hall is ? ⑫Have you told me where Jordan Hall is ? ⑬Do I know where Jordan Hall is ?
関 係	⑭Will you tell me where Jordan Hall is ? ⑮Would you tell me where Jordan Hall is ? ⑯Won't you tell me where Jordan Hall is ? ⑰Do you want to tell me where Jordan Hall is ?
義 務	⑱Shouldn't you tell me where Jordan Hall is ?

さの順序がClark & Schunk (1980) の場合とかなり異なることを見いだした。たとえば、仮定法を含む要求文は、仮定法を含まない要求よりも丁寧ではないと評定されていた。彼らは、こうした結果から、間接的要求の丁寧さは損益理論によって完全には説明されえないと批判した。

Clark & Schunk (1981) は上記のような批判に反論した。その反論の要点は、実験1のみを部分的に追試して異なる結果を得ていること、その異なる結果がなぜ生じたかを論じていないことの2つである。Clark & Schunk (1981) は、2つの研究の間に異なる結果が生じた一因として、Kemper & Thissen (1981) では、話し手と聞き手との関係を特定しなかったため、そこでの評定者は、各要求文がどのくらい丁寧かではなく、どのくらい慣習的かを評定していたことによるのではないかと推定した。すなわち、損益理論においては、話し手と聞き手の関係は重要な意味をもつという前提にたつて、Clark & Schunk (1980) では、「親しくはないが、知った仲間」という状況を設定したが、Kemper & Thissen (1981) では何らの設定もしなかったために結果に相違が生じた可能性があると思なした。

3.2.3 慣習的意味モデル

このモデルでは、人は間接的要求を理解する際に、その慣習的な解釈に対してあらかじめバイアスがかかっていると考える。つまり、人は、字義通りではな

い文において、字義通りの意味と、伝達される意味の両方を同時に処理するわけではなく、むしろ、所与の状況的文脈で、字義通りの解釈の分析がなされる前に、文が慣習的に何を意味するのかを常に分析すると見なす。かくして、慣習的な字義通りではない間接的要求を理解する際には、文の字義通りの意味の分析は一切なされずに、文の慣習的な意味と字義通りの意味とが実際には同じになる場合があると想定する。

慣習性に関しては、2.2で述べたように Searle が論及したが、Gibbs は、上記のようなモデルを提案しながら (Gibbs, 1982, 1984)、この問題を実験的に検討した (Gibbs, 1979, 1983)。ここで、彼自身の紹介 (Gibbs, 1982) による典型的な研究をみてみよう。まず、以下のような仮説をたてた。多重意味モデルが正しいならば、字義通りの意味が、伝達される意味と無関係であっても、字義通りの意味処理からの何らかの残存物があるはずであり、一方、慣習的意味モデルが正しいならば、字義通りの意味処理が生じた証拠はあるはずがない。さらに、慣習的な字義通りではない間接的要求が字義通りに読まれると、たとえそれが伝達された意味に無関係であっても、慣習的な字義通りではない解釈がなされた証拠があるはずである。以上のような仮説のもとに、たとえば、“Can’t you be friendly?” という文を、「(他人と) 親しくできないのですか。」という意味で字義通りの質問として用いた短い話と、「他人と親しくしなさい。」という意味で間接的要求として用いた短い話を提示した。その直後、先の文に関して、4つのターゲット文のうちの1つを提示した。そこでターゲット文とは、①字義通りに質問としての意味をもつが表現の点で多少異なる文、②慣習的な間接的意味をもつ文、③無関連な文、および、④文法から逸脱した文をさす。被験者の課題は、提示されたターゲット文が意味をなす文か否かを判断することであった。その結果、間接的要求文を含む話を読んだ被験者は、①より②に対してずっと速く反応すること、および、①と③の間には、反応時間に差がないことなどが認められた。Gibbs は、以上の結果を、字義通りの意味処理の残存物がなかったことを示すものと見なした。つまり、以上の結果は、多重意味モデルを支持するものではなく、理解の際に文の慣習的な解釈に対してバイアスがかかっているという慣習的意味モデルを支持するものと考えた。

3.3 理解要因

理解要因に関する心理学的な研究は2つに大別できる。1つは、2.2で述べた Austin と Searle による適切

性条件にかかわるものである。これに関しては、Clark (1979) が先駆的な位置をしめ、その後、この研究にもとづいて多くの研究がなされてきた。もう1つは、やはり2.2で述べた Grice による会話の公理にかかわるものである。これに関する研究は、子どもを対象にしたものに集中している (たとえば、Ackerman, 1981; Conti & Camras, 1984; Pellegrini, Brody, & Stoneman, 1987)。ここでの結論としては、とくに就学以後に、公理に関する知識が増すこと、あるいは公理に関する知識を使用することが可能になることなどが明らかになっている。しかし、それらの点に関する成立機制はほとんど論議されていない。

3.3.1 Clark (1979) と関連研究

Clark (1979) は、聞き手が、間接的要求文における字義通りの意味が重要かどうかを理解する際の6つの要因をあげた。すなわち、①手段の慣習性、②形式の慣習性、③間接的要求の文字通りの意味への回答の明瞭さ、④意図されている要求の透明度、⑤‘please’のような特定の言語的標識(marker)の存在、⑥話し手の目標や計画に関する先行情報や手がかり、という6つである。上記のうち、①、②、④、および⑤は発話自体の言語的特徴からなり、③と⑥は発話の生じる状況にもとづいて聞き手がいだく期待から生じるものである。彼は、これら6つの要因を統合する心理的過程に関してはさらに研究が必要だとしている。

Clark & Schunk (1980) は、3.2.2で述べたように、間接的要求の丁寧さに関して検討した。彼らは、そのなかで、上記のような6つの要因を補足するものとして以下の要因を指摘した。まず、聞き手が間接的な意味に関して丁寧になるための要因として次の5つをあげた。すなわち、①話し手の望むだけ正確な表現をする(正確性)、②話し手に確実に理解されるように表現する(明晰性)、③話し手が明確に要求をするほど、つまり要求の形態が慣習的なほど、望まれた情報を提供しやすくなる(重大性)、④聞き手が情報を与えないならば、聞き手は謝罪する(謝罪)、⑤聞き手が情報を与えないならば、聞き手はその理由を説明する(理由)、という5つである。また、聞き手が字義通りの意味に関して丁寧になるための要因として、①字義通りの意味を明確に扱うこと、②字義通りの意味に明確に反応していることを示すために字義通りの反応をすること、③字義通りの意味を、より注意して与えること、④字義通りの反応を頻繁に用いるわけではなく、和らげた表現をする場合が多いこと、という4つをあげた。

以下では、上記の2つの研究に関連する諸研究を整

理する。

仲・藤谷・無藤(1982)は、Clark(1979)の追試をおこなって、6つの要因の効果を確認した。また、その他の要因として、①聞き手は、既有知識と期待を作用させて、かつ、話し手の知識や期待を考慮しながら、要求を理解すること、②聞き手は、要求文の字義通りの意味に反応することが状況的文脈において不適切である場合、反応を避けること、という2点を見いだした。②の結果は、Clark & Schunk(1980)による、聞き手が字義通りの意味に関して丁寧になるための諸要因につけ加えることができる。

仲・無藤(1983)は、大学生を対象にして、発話の効力を同定するためには、話し手の目標と聞き手の協力に関する情報が効果的であること、および、文脈的情報から要求の内容を推測するのには、話し手の目標、話し手の状況、聞き手の状況、聞き手の協力の順で効果が大きくなるという結果を得た。彼らは、この結果に対して、字義通りの意味と内容という間接的要求の2つの側面の理解が、異なる心理的過程によっている可能性があるとした。これらの結果は、Clark(1979)の6つの要因のうち、主に⑥に関するものである。

Gibbs(1981,1986)は、Clark(1979)における①と②をとりあげ、これらと場面の要因との間に交互作用がある場合を見いだした。

Abbeduto, Davies, & Furman(1988)は、Clark(1979)の③に関して、健常児の群と精神遅滞児の群を比較した。その結果、両群ともこの要因をほぼ同様に操作できることが明らかになった。

村田・橋元(1983a,1983b)は、小学校2年生、小学校5年生、および大学生を対象に、話し手に対して、どの程度、外面的行動や発話の背後に内面的な傾向性を想定できるかを分析した。その結果、発達とともに、発話の字義通りの意味や表面的な手がかりだけを認知する段階から、内面的な意図や属性をよく認識する段階へ移ることが示唆された。これら2つの研究は、Clark(1979)の⑥に主に関連している。

4. 今後の課題

以上の間接的発話行為をめぐる諸研究の検討から、次の6つの課題が考えられる。

第1は、間接的発話行為研究を心理学のなかでどのように位置づけるべきかという課題である。Dillon, Coleman, Fahnestock, & Agar(1985)によれば、Austinらの哲学者にとっての主要な関心は、特定の状況のなかで、発話はどのような規則によって意味の範囲を割

り当てているのかという点にある。これに対して、心理学者は、そうした点に注意をはらうばかりでなく、その規則が特定の意味の範囲を割り当てる過程をも示そうとする。換言すれば、話し手の動機や意図を推論する過程を説明することにも関心を向けている。どのような発話を利用するかが人間の認識能力と全面的にかかわりをもつ(Clark & Clark, 1977)とすれば、推論過程の検討はなおさら重要な意義をおびてくる。ただし、留意すべき点は、間接的発話行為自体の特性を詳細化することにとらわれるのではなく、間接的発話行為を研究することを通して、統合されたシステムとしての人間の心のモデルを明らかにしていこうとする観点をもつことであろう。

以下に列举する課題は、以上に述べた課題を大きな目標と見なすと、そのなかに組みこまれうる下位目標にあたるものである。

第2は、被験者に質問紙に対する反応を筆答させるという、ほとんどの研究で採用されている実験方法上の問題である。こうした実験方法は、日常は音声言語でなされる発話を、書記言語に変換していることになる。この方法がとられる原因は、さまざまな条件をできるかぎり統制することによって、主要な機制を明らかにしようとしていることにある。しかしながら、このような方法から得られる結果には、いくつかの重要な要因が反映していないことをみのがしてはならない。すなわち、これまでの大半の研究は、日常の談話場面において、話し手と聞き手は互いに相手の表情や姿勢の面からも発話を生産したり、あるいは理解しているという点、また、話し手の発話における抑揚、強勢、声量、速度、声の特徴などの音韻や音声の面からも、聞き手は発話の効力を推論し、理解に達しているという点をそぎおとしているのである。音声言語を分析した研究としては、電話を用いて聞き手の反応を収集したClark(1979)や、実験室内で口頭による反応を求めた岡本(1986)などがあるが、いずれもこうした諸要因を十分に吟味しているとはいいがたい。今後、これらの要因を勘案した実験方法を用いた研究が望まれる。

第3に、比較文化的な研究にかかわる問題がある。通常、比較文化研究は、文化間の共通性と相違性とを明らかにしたうえで、結果のもつ意義が考察される。しかしながら、間接的発話行為研究においては、多くの場合、結果の対照ばかりが先走りしてしまい、この点が十分におさえられていない。たとえば、3.3.1で述べたように、Clark(1979)は、理解要因の1つとして、‘please’のような特定の言語的標識をあげ、この研究

を追試した仲・無藤・藤谷 (1982) は、日本語では「すみませんが」のような標識が要因となっていることを確認した。しかし、後者の研究は、日本語のなかでのその標識の機能については検討しているものの、上述の点を十分に明確にしているとはいえない。こうした例と関連して、ヨーロッパにおける英語以外の多くの言語では、‘please’ に相応する単語をあまり頻繁には用いない (Crystal, 1987) ことを考慮にいと、上述した比較文化研究の要件の重要性が増してくる。

第4に、3.1から3.3.1での大半の研究のように、いわば談話のなかのごく一部をはぎとった形での間接的発話行為を論議するのではなく、Levinson (1984) の主張するように、間接的発話行為を談話のなかの事象として検討することが重要である。そうした方法をとることによって、知識は談話の構成をどのように統制するのかという点がより綿密に吟味される可能性が高くなるからである。

第5に、Clark & Carlson (1981), Clark, Schreuder, & Buttrick (1983), Clark & Schaefer (1989) の提案する共通基盤 (common ground) を理論的な枠組みとして検討することが今後の研究の1つの方向だと考えられる。彼らによれば、共通基盤とは、話し手と聞き手との相互の知識・信念・仮定をさす。これは、主に、認知的証拠、言語的証拠、社会的メンバーシップという3つの情報源によって得られる。認知的証拠とは、話し手と聞き手が共に経験したこと、あるいは経験していることをさす。言語的証拠とは、話し手と聞き手が、言ったり、聞いたりしたこと、あるいはそうしていることをさす。社会的メンバーシップとは、ある社会のなかで、話し手と聞き手が、相互に、知っていたり、信じていたり、仮定していることをさす。Clarkらは、この概念を談話の心理学的な機構を解明するために実験的に検討してきている (たとえば、Clark & Wilkes-Gibbs, 1986; Clark & Schaefer, 1987; Schober & Clark, 1989)。しかしながら、この概念を用いた間接的発話行為の研究はまだなされていない。間接的発話行為研究にかかわって、共通基盤という概念の重要性として次の3つが考えられる。第1に、共通基盤それ自体は、発話の意味の一部ではないが、ある程度の意味を規定しうることである。この点で、共通基盤という概念は語用論と意味論とをつなぐための有効な道具となる可能性がある。第2に、この概念がGibbsの障害仮説、およびClarkらの損益理論・注意仮説を包括していることである。なぜならば、いずれの説も、話し手からの聞き手への心づかいの程度を焦点化しているという点で、

共通基盤と軌を一にしているからである。第3に、この概念は、談話が、単に情報を伝達する以外に多様な機能をもつことを検討するための1つの方法だということである。情報伝達以外の機能とは、たとえば、池上・梅本 (1985) で示されたように、対人関係を調整する機能である。ただし、現状では、共通基盤という概念によって扱われている領域があまりに広範であるから、今後、より整理していく必要がある。

第6に、発達研究がより多くなされねばならない。3.1から3.3.1でみたように、ほとんどの研究が大学生を被験者にしたものである。このことの原因は、研究の目的にあるというよりも、もっぱら研究の実施しやすさにあると考えられる。間接的発話行為における生産や理解に関して発達理論を構築することは、統合されたシステムとしての人間の心がどのように成立していくのかという点を解明するものとしての意義をもつであろう。

引用文献

- Abbeduto, L., Davies, B., & Furman, L. 1988 The development of speech act comprehension in mentally retarded individuals and nonretarded children. *Child Development*, **59**, 1460—1472.
- Ackerman, B. 1981 Young children's understanding of a speaker's intentional use of a false utterance. *Developmental Psychology*, **17**, 472—480.
- Austin, J.L. 1962 *How to do things with words*. Oxford University Press. 坂本百大 (訳) 1978 言語と行為 大修館書店
- Carrell, P.L. 1981 Children's understanding of indirect requests: Comparing child and adult comprehension. *Journal of Child Language*, **8**, 329—345.
- Clark, H.H. 1979 Responding to indirect speech acts. *Cognitive Psychology*, **11**, 430—477.
- Clark, H.H., & Carlson, T.B. 1982 Hearers and speech acts. *Language*, **58**, 2, 332—373.
- Clark, H.H., & Clark, E.V. 1977 *Psychology and language*. Harcourt Brace Javanovich. 藤永保・小菅京子・酒井たか子・秦野悦子 (訳) 1986 心理言語学 心とことばの研究 (上) 新曜社
- Clark, H.H., & Lucy, P. 1975 Understanding what is meant from what is said: A study in conversationally conveyed requests. *Journal*

- of *Verbal Learning and Verbal Behavior*, **14**, 56—72.
- Clark, H.H., & Schaefer, E.F. 1987 Concealing one's meaning from overhearers. *Journal of Memory and Language*, **26**, 209—225.
- Clark, H.H., & Schaefer, E.F. 1989 Contributing to discourse. *Cognitive Science*, **13**, 259—294.
- Clark, H.H., Schreuder, R., & Buttrick, S. 1983 Common ground and the understanding of demonstrative references. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **22**, 245—258.
- Clark, H.H., & Schunk, D.H. 1980 Polite responses to polite requests. *Cognition*, **8**, 111—143.
- Clark, H.H., & Schunk, D.H. 1981 Politeness in requests: A rejoinder to Kemper and Thissen. *Cognition*, **9**, 311—315.
- Clark, H.H., & Wilekes—Gibbs, D. 1986 Referring as a collaborative process. *Cognition*, **22**, 1—39.
- Conti, D.J., & Camras, L.A. 1984 Children's understanding of conversational principles. *Journal of Experimental Child Psychology*, **38**, 456—463.
- Crystal, D. 1987 *The Cambridge encyclopedia of language*. Cambridge University Press.
- Dascal, M. 1987 Defending literal meaning. *Cognitive Science*, **11**, 259—281.
- Dascal, M. 1989 On the roles of context and literal meaning in understanding. *Cognitive Science*, **13**, 253—257.
- Dillon, G.L., Coleman, L., Fahnestock, J., & Agar, M. 1985 Review article. *Language*, **61**, 2, 446—471.
- Elrod, M.M. 1983 Young children's responses to direct and indirect directives. *Journal of Genetic Psychology*, **143**, 217—227.
- Francik, E.P., & Clark, H.H. 1985 How to make requests that overcome obstacles to compliance. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **24**, 560—568.
- Frege, G. 1892 Über Sinn und Bedeutung. *Zeitschrift für Philosophie und Philosophische Kritik*, **100**, 25—50. 土屋 俊 (訳) 1986 意義と意味について 坂本百大(編) 現代哲学基本論 文集 I 勁草書房
- Gibbs, R.W. 1979 Contextual effects in understanding indirect requests. *Discourse Processes*, **2**, 1—10.
- Gibbs, R.W. 1981 Your wish is my command: Convention and context in interpreting indirect requests. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **20**, 431—444.
- Gibbs, R.W. 1982 A critical examination of the contribution of literal meaning to understanding nonliteral discourse. *Text*, **2**, 9—27.
- Gibbs, R.W. 1983 Do people always process the literal meanings of indirect requests? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **9**, 3, 524—533.
- Gibbs, R.W. 1984 Literal meaning and psychological theory. *Cognitive Science*, **8**, 275—304.
- Gibbs, R.W. 1986 What makes some indirect speech acts conventional? *Journal of Memory and Language*, **25**, 181—196.
- Gibbs, R.W., & Mueller, R.G. 1988 Conversational sequences and preference for indirect speech acts. *Discourse Processes*, **11**, 101—116.
- Grice, H.P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech acts*. Academic Press.
- Grice, H.P. 1978 Some further notes on logic and conversation. In P. Cole (Ed.), *Syntax and semantics 9: Pragmatics*. Academic Press.
- 池上知子・梅本堯夫 1986 子どもの発話行為と対人関係技能の発達 発達研究, **2**, 125—135.
- 入谷敏男 1981 言語心理学 最近の動向 サイコロジ, **2**, 18—27.
- 河上誓作 1980 構造から機能へ 言語, **12**, 14—21.
- Kemper, S. & Thissen, D. 1981 How polite?: A reply to Clark and Schunk. *Cognition*, **9**, 305—309.
- Leonard, L.B., Wilcox, M.J., Fulmer, K.C., & Davis, G.A. 1978 Understanding indirect requests: An investigation of children's comprehension of pragmatic meanings. *Journal of Speech and Hearing Research*, **21**, 528—537.
- Levinson, S. 1983 *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- 村田光二・橋元良明 1983a 間接的言語行為と発話

- 者認知の発達的研究(I) 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 106—107.
- 村田光二・橋元良明 1983b 間接的言語行為と発話者認知の発達的研究(II) 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 108—109.
- 仲真紀子・無藤 隆・藤谷玲子 1982 間接的要求の理解に関わる要因 教育心理学研究, **30**, 3, 175—184.
- 仲真紀子・無藤 隆 1983 間接的要求の理解における文脈の効果 教育心理学研究, **31**, 3, 195—202.
- 岡本真一郎 1984 要求の言語表現の検討 愛知学院大学文学部紀要, **14**, 29—41.
- 岡本真一郎 1986 依頼の言語的スタイル 実験社会心理学研究 **26**, 1, 47—56.
- 岡本真一郎 1988 依頼表現の使い分けの規定要因 愛知学院大学文学部紀要, **18**, 7—14.
- Pellegrini, A.D., Brody, G.H., & Stoneman, Z. 1987 Children's conversational competence with their parents. *Discourse Processes*, **10**, 93—106.
- Schober, M.F., & Clark, H.H. 1989 Understanding by addressees and overhearers. *Cognitive Psychology*, **21**, 211—232.
- Searle, J.R. 1969 *Speech acts*. Cambridge University Press. 坂本百大・土屋 俊(訳) 1986 言語行為 勁草書房
- Searle, J.R. 1975 Indirect speech acts. In P. Cole & J.L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech acts*. Academic Press.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1981 *Pragmatics. Cognition*, **10**, 281—286.
- 田窪行則 1988 語用論 林 栄一・小泉 保(編) 言語学の潮流 勁草書房
- 戸田正直・阿部純一・桃内佳雄・往住彰文 1986 認知科学入門 「知」の構造へのアプローチ サイエンス社
- Wilkinson, L.C., Wilkinson, A.C., Spinelli, F., & Chiang, C.P. 1984 Metalinguistic knowledge of pragmatic rules in school age children. *Child Development*, **55**, 2130—2140.
- 山梨正明 1989 語用論 崎山 理(編) 講座日本語と日本語教育 11 言語学要説(上) 明治書院

(1990年8月27日受稿)